

將軍の世紀

やまうちまさゆき
山内昌之
武蔵野大学特任教授・
東京大学名誉教授

「第七回」豊臣の天皇

後陽成天皇が表明した「讓位」に反対する家康。
心の内にはどんな思いがあったのか。



(上) 和歌に造詣が深かった後陽成天皇
(下) 秀吉が京都に建てた邸宅・聚楽第

三井記念美術館所蔵

一、後陽成天皇と『源氏物語』

「徒然草や物語文学はややもすれば好色な話題をとりあげて穿鑿し、聞くに堪えない話題が多い。とくに伊勢物語と源氏物語は若い男女が読むのを禁じるべきだ。それらは淫乱を導く媒介物ともなる。それなのに、貴顕が源氏物語を日本の宝だと言う理由を知らない。さだめし日本語の珠玉の粹を極めた心酔したからだろう」

源氏や伊勢を指して、「いはゆる庶子の春花を採て、家丞の秋実を忘るゝ也」と江戸中期に批判したのは、『駿台雑話』の儒学者・室鳩巢である。「庶子という官職にあった劉楨の春の花のごとき華やかさに目を奪われ、家丞の職にある邢顒の秋の実りのような堅実さを忘れている」とは、陳寿の『三国志』第十二にある言葉である。室鳩巢によれば、『詩経』を読むのに「淫奔の詩」で勸善懲惡を示すに近い。近年には『源氏物語』を注釈・講義して、人の世を戒める教えだとするのは、人を無理やり言いくるめるものだ。室鳩巢は、どこの世界で皇后と密通し、継母や寡婦となった兄嫁にみだらに振る舞う人間を美化できるのかと手厳しい。伊勢や源氏は、唐の恋愛詩『長恨歌』、元の恋愛雑劇『西廂記』と同類

であり、冗長で醜悪な作品なのだ、と批判する。

ところが、武家方の室鳩巢の批判に反して源氏や伊勢の講釈が喜ばれる別世界があった。禁裏である。彼の生まれる六十年ほど前、慶長五年（一六〇〇）九月十五日に関ヶ原合戦の火蓋が切られたとき、後陽成天皇の宮廷模様は、徳川家康が天下取りに乗り出した緊迫感もものは、王朝文学の世界を彷彿させる異質な色合いに覆われていた。八月十五日には「めい月の御いはる」（名月の御宴）が行われ、清涼殿で「月おかませらるゝ」（月を拝んだ）と思えば、九月九日には重陽（菊の節句）の和歌会を設けている。山城の御料地で西軍が陣を張り狼藉を働いた事件に困惑する以外に、国の将来を左右する決戦が迫っている緊迫感あまり見られない（『お湯殿の上の日記』慶長五年八月十五日、九月九日条。『言経卿記』十、慶長五年九月一日条）。

後陽成天皇は、秀吉が関白として天下に号令した頃から、武家の棟梁たる將軍の職を家康・秀忠に宣下した前後まで、京都に君臨した天子である。天皇はこのうえもない天運に恵まれて即位した。父の誠仁親王は正親町天皇の一宮として織田信長にも期待されながら、三十五歳の若さで急逝した。そこで子の和仁は、親王宣下と元服

の儀をあわただしく済ませ、天正十四年（一五八六）十一月に、祖父の養子として踐祚した。これは古代の文武天皇以来の嫡孫承祖であり、「御果報の王位」と呼ばれたが、治世はなかなか起伏に富むものとなる。

後陽成天皇は、藤原定家の歌論を公家や女官に講じる博識に恵まれ、『源氏物語聞書』や『伊勢物語愚案抄』を著した。歴代きっての能書家であり、絵も巧みに描き、和歌や漢詩をよくした。帝は儒学にも造詣が深く、慶長勅版の『日本書紀』を刊行し、『貞観政要』や『群書治要』の統治論も知らぬはずがなかった。帝は歴代でも有数の才と感性に恵まれた人だったのだ。そして、夜も時間の経つのを忘れて『源氏』を講じた。多くの男女が一緒に深更まで時を過ごすのは、武家社会では考えられぬしきたりであった。

幸か不幸か、秀吉の富と華美な流儀に感化され、浮薄軽佻の気味もある禁裏は、ややこ踊りや奈良の狂言師らが演じる庶民の風刺芸に興じつつ、源氏や伊勢の世界を現実には置き換えて自己陶醉しがちだった。この風潮の後陽成天皇も責任がなかったとは言えない。ややこ踊りとは八歳から十一歳の少女が男女の恋を大人びた歌で媚びる舞で人気を博し、女能や女曲舞とともに宮中の余興と

文藝春秋

大正十二年一月三十日第三拾伍號発行
平成三年七月一日発行(毎月一回)日発行
第九十六巻第七号(六月九日発売)

大特集 理想の介護と最期

90歳からどう生きるか/奇跡の認知症ケア技術

「日本は核を持つべきだ」E・トッド/朝丘雪路長女の告白 七月号

95th
文藝春秋

